

## 2-5-5 正法寺の文化財

金鳳山正法寺は、この地に1683（天和3）年に開山始祖・廣普和尚が草庵を結んだことに始まり、1692（元禄5）年に千呆和尚を開山に迎えて創建された黄檗宗の寺院です。江戸時代以来の境内地を現在も継承しています。

国重要文化的景観 長良川中流域における岐阜の文化的景観（重要な構成要） 平成26年3月18日選定  
日本遺産「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜（ストーリー構成文化財）

平成27年4月24日認定

岐阜県重要文化財 昭和49年3月6日指定

籠大仏 附 木造薬師如来坐像（籠大仏）像高 13.7m （薬師如来）像高 61cm 台座 23cm

江戸時代後期に、塑像、漆箔により造立された国内最大規模の籠大仏である。第11代惟中和尚と、第12代肯宗和尚の2代にわたる約38年の歳月を費やし、1832（天保3）年に開眼供養が行なわれたという。

大仏は、胎内の骨格を木材で組み、竹材を編んで外形を作る。その上に粘土を塗り、惟中和尚が各地で集めた一切経を貼り付け、更に漆と金箔を重ねて仕上げている。また、「大真柱」と呼ばれる周長6尺（直径約57cm）の銀杏の木の柱を大仏の背面に建て、台座から胎内を通して大仏殿第3層の下部まで垂直に立てて支えている。

最大仏の胎内仏として、桧材を用いた一木彫成の薬師如来坐像が安置されている。右手は施無畏印を結び、左手は屈臂して左膝の上に置き、薬壺を持ち、二重の蓮華座に結跏趺座した姿である。姿や顔立ちから、平安時代後期の製作と推定される。

岐阜県重要文化財 昭和49年6月12日指定

木造阿弥陀如来坐像 像高 55cm 台座 35cm

籠大仏の御前立で、平安時代後期の製作と推定される。桧材の一材から彫り出し、底部に深く内削りがなされている。上品上生印を結び、二重の蓮華座に結跏趺座した姿である。

全体に一木造りの重厚さを遺し、和様を穏やかにまとめた表現がなされている。

岐阜市重要文化財 平成27年4月7日指定

正法寺大仏殿 構造 木造3層 規模 梁間19・16m×桁行19・18m×高さ23.60m

明朝<sup>みんちやう</sup>様式と和様が融合した江戸後期の建物である。大仏の構造上、大仏を造立する段階から風雨を凌ぐ覆屋<sup>おおいや</sup>が不可欠であることから、大仏造立と併行して大仏殿の造営が進められたと考えられる。

大仏殿の中心部には、高さ 23m を超える大仏を収めるために、大きな空間が形成されている。また、大仏の周囲を巡ることができる構造の回廊など、他の大仏殿に無い特殊な形態がみられる。(回廊は通常使用できない)

1876(明治9)年、第13代の楠泉<sup>きくせん</sup>和尚のもとで有志を募って大仏殿の大修理が行なわれ、現在の姿に改築された。

平成 28 年 3 月 岐阜市教育委員会

説明板より